

株式会社オフィスビル総合研究所

本田広昭

オフィスにおける知的生産性の向上は、21世紀のわが国の経済力を左右する重要な課題であり、そして、その知的創造の場にふさわしいオフィスのあり方が今問われている。

日本のオフィス空間は、自社ビル、賃貸ビルを問わず、標準的な内装が先に仕上げられて最終利用者に引き渡される供給システムが伝統的に根付いている。その結果、無味乾燥、無個性など空間への工夫やデザインが劣るオフィスの氾濫の要因となっている。近年、その内装仕様の品質は向上したものの、空間のデザイン領域は依然として狭いままである。

本来働く場は、オフィス空間と人間の感性が織りあうように形成されるものであるが、これまでは機能的に優れていれば成立すると捉えられがちだった。しかし、お客様をもてなす受付や応接室、社長室などは改装の対象とならざるを得ず、標準内装の解体廃棄費用に加えて、退去時に元の標準内装へ戻す原状回復費用の上積みを経験しての改装となる。特に天井部分は、蛍光灯器具などそのまま使用するケースが多く、せっかくの空間デザインが活かされない事例は数多く見受けられる。

つまり、新しい時代のオフィスづくりを支援するためには、オフィス空間の供給システムを再構築する必要があるといえる。オフィスにおける知的生産性の向上には、効率やコストとともに、「人」が主役の新しい価値観や感性に基づいたオフィスづくりが重要であり、空間デザインの果たす役割に大きな期待が寄せられている。

企業価値の源泉は人間の能力であり、その知的生産を生み出す「場」としてのオフィスづくりを、快適でそして個性的で豊かな空間にした企業こそが、21世紀の勝ち組なのかもしれない。